第二部・パネルディスカッション

街中ルネッサンス
～中心市街地の再活性化～

基調講演のあと、多彩なイベントを企画し中心市街地を甦らせつつある佐世保、都心でありながら未活用となっている不動産の蘇生が若者によりすすめられている東京・日本橋地区、そして新しい世代によって変貌を遂げる都市の現場、スライドを交えながらそれぞれの視点から活発な議論が展開されました。

【パネリスト】

遠田 公夫 とおだ きみお
セントラルホテル佐世保 代表取締役社長
よさこい佐世保祭実行委員会 顧問
ホテル経営の傍ら、佐世保での各種イベント、まちおこしのプロジェクトに参画し、豊富なアイデアを提案。「ビジネスはまちと共に生きる」を実践。

馬場 正尊 ばば まさたか
建築家／OpenA代表
東京R不動産制作ディレクター
設計、執筆、都市計画のコンサルティング等の業務の傍ら、独特の視点で空き物件を発見するサイト「東京R不動産」の運営や、空きビルを時限的にギャラリーにするCET（Central East Tokyo）等に参画。

牧野 光朗 まきの みつお
長野県飯田市長

【コーディネーター・パネリスト】

佐藤 友美子 さとう ゆみこ
サントリー次世代研究所 部長
ライフワークとして、世代によるライフスタイルの変化について研究する一方、内閣府観光立国懇談会、国土交通省交通政策審議会委員等を務めるなど、多方面で活躍

遠田　長崎県佐世保市から参りました。中心商店街のおじさん、おばさん達が、お金はないけど知恵と汗を出し、まちおこしにどれだけ頑張っているかをご紹介しようと思います。私たちは、まちの賑わいが大切と考え、「きらきらフェスティバル」を開催し、イルミネーションやチャリティー大パーティーなどの企画を考え、大盛況。また、「YOSAKOIさせぼ祭」という佐世保のまち全体を舞台にした大イベントも行っています。これらは単なるイベントではなく、イベントを通じたまちづくり活動です。まちづくりの夢を語り合う「若者・馬鹿者・よそ者会議」というものを開き、私ども商業者に加え、学生、行政、茶髪のお兄ちゃん、みんなに入っていただいて、色々な知恵を凝縮させながら活動しています。

馬場　東京の日本橋界隈、東京駅からも近い最高の場所なのに活用されていないビルや倉庫などの建物、普通の不動産屋さんに全く無視されていた物件を甦らせようという東京R不動産を運営しています。ウェブサイトで「改造OK」「倉庫っぽい」「レトロな味わい」「オマケつき」「お得なワケあり」などコメントをつけ、いままでになかった価値観でアピールし、それを使ってくれているアーティストや若者達と一緒に、様々なイベントも展開しています。そして、こうしたことを繰り返しているうちに、東京駅と隅田川の間を、「セントラル・イースト東京（CET）エリア」と名づけ、このエリアを中心に新しい都市の使い方、古い建物の再利用の仕方、まち自体の楽しみ方を、少しずつ実践しているところです。また、東京の中心部の次は郊外、地方都市への展開も考えています。

佐藤　サントリーの次世代研究所というところで、世代やライフスタイルといったテーマを中心に研究を行っています。例えばアンケートで「心地いい空間とは」と聞いても各世代によって答は全く違う。高年齢の世代は世間の評価が定まった上質の空間ですが、若い世代では気楽なホームパーティとか、自分が好きなようにしていられる場所となる。まちづくりに関しても、実はこういうところを根本的に押さえておかなければならないのではないかと思います。また、まちを色々と見ていきますと、亀戸のサンストリートでは、音楽やショウのタレントにお金を払ってきてもらうのではなく、お金をいただいて出演してもらうという、自己実現の場になっています。京都でも四条や河原町といった昔からの繁華街ではなく、ビジネス街だった烏丸通りや姉小路に若者が集まってきています。大阪でも「水辺ナイト」といったいわば市民活動のような動きが生まれて、ホームページの紹介だけで人が集まり都市を楽しんでいますし、近代建築が残る北船場が人気スポットになりつつあります。このように、まちづくりにおいては、人々の心の変化がもたらしたまちの変化を捉え、ライフスタイルそのものを提案するということが必要ではないかと考えています。

さて、今日は私がコーディネーターとして、色々な話を引き出し、ご来場の皆様の疑問を聞いてみることにいたします。まず、「まちなか」の状況をおさらいし、それから「まちなか再生」に向けて何をやっていくかということで進めていきたいと思います。

馬場　私は、生まれが伊万里で佐賀にも住みました。お隣の佐世保がこんなに元気なのはショックです（笑）。産業構造の変化が都市の盛衰を分けますね。

遠田　我々地方の中小企業は、失敗したら生活基盤がなくなる。まちと私ども商業者、そして市民、これは運命共同体という考え方ですから、知恵、アイデア、発想、これは生きるために最低限必要なこと。近くにあるハウステンボスがやっといま再生中ではありますが、あそこも単独で生きようとしても、そうはいかない。やはりまちとの連携。連携していかないといけないということは、我々は身にしみてわかっています。

牧野　まちなかから郊外に出て行ってしまう商店が多いことも、気になる現象です。まちの顔こそ大事なのに、行政も含めてみんな手をこまねいていた。行政の施策もバラバラ、商店街の方策もバラバラ。結局はコミュニティの弱体化がまちなか衰退の大きな原因だと思いますね。

遠田　それにないものねだりが多い、郊外には駐車場があるのに中心市街地にはない、当たり前ですよ。だったらバスのサービス券を出すとか、3000円5回買い物するとタクシー初乗り分提供するとか、駐車場を作るよりコストもぐんと安く対応できます。高齢化が進むと、車の運転できなくなる人も多くなりますから、そういう発想が必要です。

馬場　佐世保復活の最大要因はどういったことだったのですか。

遠田　佐世保は海上自衛隊や米軍基地などがあって、どちらかといえば親方日の丸のまちでした。しかし、大型商業施設が郊外に出店するという話があり、危機感が出てきて、まちの取り組みが変わってきた。そのリーダー役は、吹けば飛ぶような店の社長さん（笑）。私は、吹けば少しは揺れる程度のホテルの社長（笑）。他にも価値観が違う人たちが寄り合って、よしやろうということになった。次の日にはもう動いていましたね。

佐藤　やはり人が大事なのですね。

牧野　飯田の場合でも危機感はありました。文化的な発信力が弱くなってきていたのです。そのままちらしい固有の文化が弱まってきたということは、まちのアイデンティティの危機です。しかし、飯田には昔から文化を大切にという気風があって、何かしなければいけないということになった。菱田春草という郷土出身の日本画家の作品を美術館にという時にも、市民から相当の寄付が集まりました。

佐藤　神戸のルミナリエのように企業や行政主導でやっていると、経済・財政が変動した時に、すぐやるやらないという話になりますが、個人がベースだとそういう感じにはなりませんよね。

遠田　助成金頼みの事業は長続きしませんね。私たちのモットーは市民の力をなんとか活用しようということ。大学生を巻き込んで、学校ではこんなこと絶対に教えてくれないぞと、いっしょにスポンサー回りをし、会場のマネージメントも全部任せました。また中高校生の放送部員を司会者にしたりね。万一失敗しても命はとられない（笑）。

馬場　自発的な構造づくりは私たちも同じです。アーティストとか学生などは、結構、ボランティアで参加してくれます。自分の名前がプログラムにでると就職に有利（笑）。彼らにとって、新しい自分の能力を発見できるプロセスは魅力的なんですよ。

遠田　基本的には自分たちも楽しむことです。いまのうちに若者と楽しもうですよ。例えばスケボーしている若者に「困る」と言うのでなく、スケボータイムを作って存分にやってもらう。ストリートミュージシャンに「やかましい」ではなく、みんなでコンサートやらないかと持ちかける。ここでこういうルールでやろうと伝えれば、みんなきちんとそのルールをわかってくれます。

佐藤　よさこいにしても、みんなが参加して、そこで公共という考え方も自然に生まれるのですね。

遠田　よさこいは、全くの物まねで始めましたが、高知や札幌との連携ができ、最近では青森との連携もできました。お互いに楽しさが2倍3倍になります。こうした連携は、義理人情から生まれます。やはりまちなかは義理人情ですよ。

馬場　日本橋でも参加している20代は意外に義理人情が好きなんです。茶髪のお兄ちゃんと日本橋の職人さんたちは気が合う。僕なんかが少し微妙なのは、中心市街地は大事だと思うんですけど、郊外のショッピングセンターも嫌いじゃない、小さい時からお世話になって育ってきていますから、あ

ディスカッションの様子

新しい佐世保の四季を演出するイベント

人の渦 音の渦「YOSAKOIさせぼ祭」クライマックス　撮影：水田孝（4点とも）

それぞれのチームがファッションも競う

夏の風物詩「とうろう流し」

クリスマスイルミネーション「きらきらフェスティバル」